

障害者の自立生活情報

No.35
(2010年9月号)



—— 自立への道案内 ——



自立生活センター・MY-DO～まいど～の(左から)下村さん、赤松さん、井上さんです。

もくじ

●新連載「自立生活センター」(CIL)に来てみてや! CILってこんな所で～す! 第1回「自立生活センター・MY-DO～まいど～」	2
●福祉機器紹介(車いすレインコート)	13
●うめちかなびの紹介	16
●連載エッセイ(最終回)(岸田美智子)	17
●インクル教育セミナー報告(平沼遊)	19
●編集後記	20

「自立生活センター」(CIL)に来てみてや！CILってこんな所で～す！

第1回 「自立生活センター・MY－DO～まいど～」

取材日：2010年7月8日（木）

日本版「自立生活センター助成」といわれた市町村障害者生活支援事業が始まって15年が経ちます。この間に自立生活センター（CIL）は地域での障害者の相談支援の拠点として活動を行なってきた。その他にも各々のセンターでは地域との繋がりを作るための取り組みや、障害者のエンパワーメントに向けた独自の取り組みを行なっています。

ナビゲーションの新しい連載『「自立生活センター」（CIL）に来てみてや！CILってこんな所で～す！』では、こうした、各自立生活センターの取り組みやそれぞれの思いを紹介し、障害当事者や関係者にとって自立生活センターがより身近な存在となり障害者の自立生活にとってこれまで以上に頼れる存在になればと考えています。

さて、その新連載のトップを飾るのは、大阪市住吉区にある社会福祉法人『あいえる協会「自立生活センター・まいど」』さんです。取材当日は「ナビゲーション」ではエッセイでもおなじみの管理者の岸田美智子さんはあいにくご不在でしたが、当事者スタッフの下村雅哉さん、赤松健司さん、新人スタッフの井上摩耶さんにたっぷりとお話を伺いました。

始まりは「外出サービス」から

南光：管理者の岸田さんには、エッセイを書いてもらっていて「まいど」さんにはお世話になっています。更にまた今回は、この新企画でも「まいど」さんのご協力をお願いします。

下村：はい。よろしく。

南光：では、「まいど」さんが出来るまでの経過を教えてください。

下村：どこから話せばいいのかな？

南光：施設の外出取り組みからお願いします。

下村：「まいど」のもとになる、施設障害者の外出サービスを始めたのが1989年。もう20年以上になります。岸田さんの友達で施設に入っている人が多くて、そんな中で職員の暴力とか性的虐待などの人権問題があったのですが、同じ障害者として何とかしたい、と思っていたんですが、なかなか動けなかった。

南光：そんな思いは皆持っていると思うけど、どうすれば良いか解からないですね。

下村：誰にとっても、いきなり施設の中を変える事なんて難しいし、とりあえず施設の問題とかを話す場を持つとうとして、施設の障害者だけでなく職員にも声をかけて行きました。

南光：初めは岸田さんと、今はあいえる協会理事長の古田さんが主なメンバー？

下村：その他に施設の職員の人とかも関わって、まず、通信を発行することで施設の実態をアピールしようという事になったんです。でも、施設側からも障害者の方からもなかなかいろんな問題が出てこない。

南光：出てこないんですか？

下村：20年前は、施設の中のことを話すと出て行けと言われてたりしましたからね。情報が出てこないんです。

南光：それって怖いですね。

下村：そうです。だから施設の障害者と関わりを持つ事から始めていくことが大切……。ということで、どうしたら関われるか？と考えたときに、まず、「外出」が良いと思いました。施設からの外出もなかなか、出来ない時代でしたから。

南光：その頃、今みたいな移動支援とか全くなかったから、どうしたんですか？

下村：もちろん施設ガイドヘルプもなかったもんね。

南光：じゃ、ボランティアを集めて？

下村：初めはボランティアで。外出の活動をしながら、その中から出てくる施設の状況とか問題を話して、そうした事を積み重ねていき、大阪市とか大阪府に働きかけをしていきました。そのうち「大阪市全身性障害者介護人派遣事業」という介護の制度が出来て、外出の部分施設の人にも適用させたんです。

南光：「大阪市全身性障害者介護人派遣事業」という制度には、家事と身体と外出って一応分かれてたもんね。

下村：身体と家事は施設の職員がやるけど、外出は出来ないから「認めろ」と言って、認めてくれて。それを使って外出取り組みをやっていたんです。

南光：会員制やったよね？

下村：あっちこっちの施設に入ってた人が会員で。北は、わらしべ園。南は岸和田光生療護園とか熊取弥栄園とか。後は堺の府立身障センター。



向かって左が下村さん、右が赤松さんです

「作業所」や「グループホーム」も

南光：そういう活動をやっていった、次の段階としてやった事は？

下村：僕らも関わり始めたのが、就職懇談会。就職するのはなかなか難しい。就職しても色んな問題がある障害者の集まりがあって、古田さんが中心になって集まっていた。なかなか就職が出来ないし。新しい活動を自分達でやっていこう。障害者の仕事として施設障害者の「外出サービス」のコーディネーター、施設取り組みに関わることで92年に作業所を作ったんです。そこには看板が2つあって、「作業所」と「外出サービス」という。

赤松：その作業所の中に、車いすでも使えるお風呂と台所とトイレもあってベッドもあったんです。

下村：外出もいいんやけど、せっかく事務所にお風呂もあるし台所もあるし布団もあるから、「ここに泊まろう。」っていうことになって。施設の人を呼んでそういう取り組みを1ヶ月に1回はしていた。

下村：岸田さんも重度障害者でしょ。親の介護だけやったらしんどい。家も狭かったから。それでグループホームを作って、そこに入ってボランティアが介護していた。

南光：作業所やグループホームとかも出来てきて障害者も集まってきて、その後は？

赤松：それで、施設との関わりを深めていった情報交換も出来るようになったし、色んな問題なんかも把握できるようになった。

下村：外出サービスはボランティアやから。施設も大抵山奥やから。朝6時ごろから施設に行って外出して夜遅く施設に送り届けるとい、ボランティアにとっては一日仕事でよく関わってくれたと思う。

赤松：古田さんが車を運転してたんやけど、施設から送迎してて。みんなを送って、終わるのが夜の1時ぐらいになって、めちゃくちゃしんどかったって聞いた。

下村：古田さんは一番軽い障害者やから、僕のヘルパーもやってくれた。

南光：古田くんが介護やってくれたん？！

下村：そう。そういう時代。15、6年前。

赤松：その頃には、池田さんも入ってたんですね。

下村：僕のヘルパーは古田さんとか池田さんがしてくれていた。

赤松：ヘルパー事業所もなかったし、ほとんどボランティアだけやったからね。

下村：それと、ボクは歩けたし障害が軽すぎて全身性の制度は使えなかった。

「地域移行」が怖がられた時代

南光：それで、池田さんとかもボランティアで入ってきたんやね。その後やけども、それが「まいど」にどうやって繋がっていったん？

下村：95年頃の話になるけど、外出支援の活動だけだったらよかったんやけど、地域移行

という言葉が出るとあっちこっちの施設から反発受けて。施設にとったら僕らは怖い存在になって。

赤松：施設への出入りも厳しくなったんです。

下村：熊取弥栄園とか、全部やめさせられた。絶縁状態やという感じかなあ。

南光：今では地域移行が、行政とか施設側にもようやく当たり前の考えになってると思うけどね。

下村：その頃は、僕らが行くと荷物をまとめていて、地域移行させてもらえると勘違いする障害者もおった。待ってた人もおったよ。

南光：施設から出て行きたいと思ってた人多かったんですよ。でも、出て行きたいと思ってても自分だけやったら何も出来ないから、期待されるよね。

赤松：そうですね。

南光：それで、いよいよ「まいど」を作ろうということになって、「まいど」が出来たのは98年かな？

下村：98年の5月です。準備会はしてて後援会も呼びかけてもらって、南光さんとか府立大学の定藤さんとかも運営委員もやってくれてた。今の事務所に引越して正式に活動したのが98年5月。

赤松：このときは、外出支援がほとんどだったと聞いてますけど。

下村：「まいど」として集団ILPとかもやりだしたけど。作業所は作業所でお泊り会とかやってた。

南光：「まいど」の設立当時と今では、活動の内容とか相談内容とか自分たちの役割の中で変わってきたなって事がありますか？

赤松：最初はボランティアがメインやったけど、支援費制度に変わりましたよね。その辺りから、私達の仕事も「専門職」に変わったと思うんです。それが一番大きいことかな。ヘルパーの派遣事業所も必要になってきたし、日中活動の場もいるやろうし、グループホームや福祉ホームを拡充していかなアカンし。そうしたことがなければ、いつまでたっても施設からの地域移行できへん。そういう働きかけをやってきた。仕事が変わってきたかなー。

下村：他の事業所とたくさん関わっていくようになったかなと思う。

赤松：変革の時期やったんかなって思います。地域移行の関係でILPもするようになったし、体験宿泊もするようになったし、移行の支援が形になったと思います。施設からグループホームそれから一人暮らしという地域移行の形ができてきた。

下村：やっぱり施設からの地域移行にこだわって、外に出たいという声で集まってきた障害者主体で地域移行する力を作ってきた。その力でヘルパー事業所とか福祉ホームとかも作ってきたかなって思う。

南光：福祉ホームを立ち上げてみて、どんな問題がありますか？

下村：福祉ホーム3年間で一人暮らしへ移行っていう決まりがあるんで・・・。

南光：3年って確かに短い感じですよ。入ったと思ったら出ていかなアカンっていう感じやもんね。

赤松：福祉ホームあいえるでもその問題も出てる。実際問題3年で区切るのはどうかという意見も出てきてるし。

下村：いろいろ課題があることも事実です。

南光：福祉ホームあいえるのメンバーの支援も「まいど」でやってるんですか。

下村：モニタリングとか、あいえる協会のメンバーの支援をしています。

赤松：福祉ホーム作った時から障害者と連携をとりながら。

南光：それは、どんな形で？

赤松：モニタリングを1ヶ月に1回しています。何か問題かあったら解決に向けてやってます。

南光：例えば、福祉ホームあいえるの入居者が退居するときの支援とかもやってるん？

下村：やってます。モニタリングも含めて。今は「まいど」に当事者スタッフが3人しかいないから他の事業所と話し相談してやってる。

松崎：「まいど」で特に大事にしていることとか、思いとかありますか。

赤松：個人的に思うんですけど、楽しくやっていくほうがいいと思うんです。仕事が楽しくなかったら支援される人も楽しくないと思うんです。そういう連鎖反応はあると思うんです。

南光：突然ですが「まいど」の名づけ親って誰ですか？

井上：岸田さんから伝言があるんですけど、名づけ親は岸田さん。まいどという名前にしたのは関西弁を使って、覚えやすく記憶に残るからということで、「まいど」。そこにMY DOっていう「自分のペースで自分のすること、自分のやりたいことをやる。」「まいど」とMYDOをかけて。

南光：大阪らしいね。でも、電話受ける時に「まいど！」って・・・どう？

下村：僕の場合、言語障害があるから、誤解される。電話で一生懸命、自立生活センターまいど、っていうけど、聞き取ってくれないから、結局、自分の名前を言って。

南光：挨拶してるみたいに聞こえるからかあ〜。

下村：大阪の自立生活センターはユニークな名前が多い、言うのも難しいよね。

南光：難しいのは名前だけじゃないでしょ？

赤松：ほんま、この仕事って難しいね。人材も確保するのも大変やなと思いました。

南光：何が一番難しいですか？

赤松：制度が解らないから難しい。ころころ変わっていくし。覚えたと思ったら変わっていくし。

南光：そのほかで難しいことはありますか？

赤松：以前の川嶋さんの講演の中で「障害者は自覚しなさい。」っていうことを言うてはって、ええ言葉やなって思いました。ものすごく響く言葉やなって思いました。自覚してない部分もあるし。これからの当事者にとっても響く言葉かなって。今やったら電話で事業所探したら来てくれますやん。昔はボランティアをも見つけるのも必死やった。今の障害者は、そういうことを知らんから、そういうことも伝えていかなアカンと思う。



赤松さんです

「地域移行」にちからを！

南光：「まいど」で 大切にしていることは。

赤松：地域移行に力を入れることやと思います。支援体制の強化と充実やと思います。これまでに30人ぐらい地域移行しました。今も20人ぐらい支援しています。その中には重複の方も居てるし。

下村：そういう人が地域移行のロールモデルになる。施設に訪問して遊びながらふれあいながら、意識を変えていこうと、あいえる協会とともにやっていこうと思っています。人数が多いから出来ることかな。

赤松：それと、この仕事、優柔不断やったら出来ませんよね。そのためには、人とは違うような感覚の人がおってもいいと思う。

南光：下村さんはどう？

下村：施設にこだわってる。僕は施設を変えること。地域を変えること。が大切やと思う。地域移行をバンバンしていく流れを作りたいな。

南光：地域移行のハードルもまだまだ高いからね。

下村：支援する団体も構えてしまっているところがあって、なんとか支援しなアカンという思いがあって、抱え込んでしまうかな。

南光：抱え込んでしまう？地域移行したら、なんでもかんでも自分達が支援していかなアカンっていう思いがあってという意味で？

下村：それもあるし、もっと外に出てほしいという意味でも。

赤松：地域移行する上で大切なのは社会資源ですやん。社会資源が不足しているやからなかなか地域移行出来ませんやん。

下村：「まいど」の考えは今言った言葉。施設からの地域移行、いろんな思いがあって、「まいど」の中でも色々ぶつかったりとか悩んでた時もあったりしたけど、気楽に地域移行出来る場を作りたいな。

赤松：地域移行される方は年配の方が多い。やっぱり、地域移行もしんどい時もありますよね。若い人が地域移行するんやったら、そんな考え持たないかもしれんけど。年配の方いうたら体力的にもしんどい。社会資源の確立もまだ進んでない。

南光：頑張らなくても、地域で生活出来るような社会資源が要るのかなあ。

赤松：もっと気楽に地域移行を考えてほしいかな。

下村：施設職員が地域の実態を知らないから。障害者の地域の暮らしとか、目の前の人はどうやって支援するか。そのことも問題。

松崎：施設も私達と同じ考えを持ってくれるかどうか。

赤松：施設側は抱え込んでるという考えがあると思います。

南光：親は施設のほうが安心して思ってますもんね。

下村：道のりは長い。若い世代頑張ってる。

「住吉、阿倍野は障害者が多い？」

南光：少し話しが変わってくるんやけど、「まいど」は住吉区と阿倍野区が圏域やけど、どんな地域性だと思いますか？

下村：障害者が多い。歩いているとすぐ出会う。

南光：外に出たら絶対どっかで障害者と会うもんね。

赤松：ガイドヘルプも確立されてきたし。

下村：一般の人でもヘルパーっていう言葉を知ってくれてる時代やし。

赤松：障害当事者が多いっていうことは、店のバリアフリー化が進んでいく。駅や公共施設のバリアフリー化も進んでくる。僕は、難波に住んでて住吉区よりバリアが多いです。実感します。

南光：そんなに違いますか。

赤松：段差が多いです。

南光：ところで、「まいど」の皆さんのいきつけの店、ありますか？

赤松：長居の王将と大阪王将。王将ばかりやけど（笑）



下村さんです

「ゆっくりナイター」

南光：「まいど」で今一番力を入れてることはなんですか？

赤松：7月から集団ILPやってる。ゆっくりナイターっていう。

井上：施設入所者対象。1泊2日の体験宿泊。ライフネットワーク作業所に通ってる人たちと外出。ご飯食べたり、夜はグループホームや福祉ホームに泊まってもらう。3つコースがあって、天王寺コース、長居コース、鶴橋コースがあって、人気は鶴橋コース。

下村：2年前にも、ゆっくりナイターをやった。3名の参加者があって、そこで2名地域移行した。今回のゆっくりナイターでも何名か地域移行できたらいいなと思ってる。ライフネットワークの人にも下見に行ってもらったり外出同行してもらったり地域移行の話をしてもらったり、「まいど」スタッフだけじゃなくってライフネットワークのメンバーも一緒になって、そういう取り組みをやらうとしてる。

下村：施設職員は、もう地域移行したい人はもうやったて言う。施設に残ってる人は重度の人と医療的ケアを抱えている方って、そういう風に思っているみたい。

赤松：ILPに参加した人が親に怒られたっていうケースもある。「施設があるのに、なんでそんなことするんや」って。

下村：親にしたら、せっかく施設に入ったのになんかという思いがあるんでしょうね。

南光：そういう思いがまだまだあるんやなあ。余計なことしてくれるなっていう思いがあるんやろな。

南光：やってて良かったなっていうことは？

下村：地域移行してくる人が増えてきてる。それが一番嬉しいことかな。

南光：30人も地域移行したら、その後も、「まいど」で支援してるんですか？

下村：頻度はそれぞれ違うけど、関わっているかな。障害者の役割。健常者の役割。分担してやっていってる。

南光：どんどん地域移行する人が増えていくわけでしょ。

赤松：これからの課題やと思います。地域移行が増えてきても支援体制がなかったら大変。

南光：その時にどうやっていくかやね。

下村：今は大変なエネルギー使っているからね。もっと気楽にやれたら関わりも変わるかな。

南光：難しかったなと思うこと。地域移行したのに、なかなか上手いこといかなかったことがありますか？難しいことが当たり前なんかなあ。

下村：地域移行してからの支援が本人のペースになってるのか、本当は支援する側の都合によってやってるんじゃないかという葛藤は常に持ってる。

赤松：これでいいのかなって思うときがある。どれが本人のニーズかなって思う。その見極めも難しい。我々がもっと勉強せなアカンとこかな。

南光：こっちの思いだけでやってしまってもねえ。

赤松：ほんま難しい問題です。

下村：本人の思いとかをどうやって支えてるのか、どこまで踏み込んだらいいのか。

赤松：地域移行のニーズも、ころころ変わっていく。そこらへんの難しさもあるかなって。

南光：これからの「まいど」について、どんなC I Lを目指していきたいですか？

赤松：地域とのつながりをもてるようなネットワークづくりを充実していきたいかなと思います。それが、当事者のエンパワメントにつながっていくんじゃないかなと思います。今までは、身体中心やったけど、今後は知的障害者、精神障害者、重複の方の支援にも力を入れてスキルアップを図っていききたいかなと思っています。若い障害者とのつながりを作っていくためにも、支援学校の在り方についてももっとやっていかなアカンと思います。

南光：下村さんは？

下村：ピア・カウンセラーが企画するんじゃなくてライフネットワークの人にも協力してもらって色々な企画をしていきたい。あとは、地域を職員も当事者も一緒になって変えていきたい。

山下：僕は生活介護にも通ってて、「まいど」さんはライフネットワークのとの繋がりもあっていいなと思うんですけど、ライフネットワークのメンバーと職員との関係って良いですか？当事者が中心となってやるには どうしたらいいんですかね？

赤松：ぶっちゃけた話、方向性は一緒。ただ若干スタンスのずれがあるかな。連携をうまく活かす。仕事に追われてる事もあるし、コミュニケーション不足が原因になってるかな。

山下：職員が、決めたことに障害者が動くことってありますか？ただ動くだけみたいな。

赤松：障害者の主体性は守ってます。それだけは守っていかなあかんと思います。健常者が障害者を動かすことはないです。

下村：施設の障害者は施設の職員の方がより安心感があるというか。やっぱり健常者の顔を伺いながら話してる時もあると思う。

南光：施設生活が長くなるほど、そうなるよね。

赤松：健常者を上に見てしまう。ヘルパーを利用する場合どう伝えていいかわからん。言い方もわからん。それは経験を積むことによって変えることができるかなって。

下村：山下さんは、そういうことを感じてるの？

山下：なんか、職員の決めたことにだけ動いてて、本当にみんなやりたいんかなあって思うときがある。企画とかも、ほとんど職員が準備したり当日も動いたりしてるから、障害者はただの利用者とか参加者になってるような気がする。



インタビューの様子

「やっぱり仲間作り」

南光：それを変えていくには？

赤松：福祉ホームあいえるで、口すっぱくして言うてるのは当事者の仲間作り。

下村：健常者もただ、支援するだけやったらアカンと思う。その人を中心に变えていく。一緒にバックアップしていく。そんな形をとってほしいなと思う。ただ支援だけだと上下関係が生まれてしまう。

赤松：仲間意識に繋がっていくお互いに生活を作っていくのが必要。仲間作りが大切やと思う。健常者、障害者関係なく。

南光：一番大切なのは仲間作りやね。

下村：障害者、健常者も大きくことを考えてほしい。今に満足するんじゃなくて10年後、20年後も一緒にやっていく視点がこれからいるかなって。

南光：今のをまとめにして、今日は終わりますでしょうか。長い時間ありがとうございました。



うめちかナビ

UMECHIKA NAVI

大阪・梅田周辺地下街MAP



パソコンもご利用できます

詳しくは

うめちかナビ

検索



WEST

NORTH

**ケータイナビで
大阪・梅田周辺地下街をご案内!**

パソコンや携帯電話で、
地上や地下の「出発地」から
「目的地」までのルート
(車いす使用ルートも!)を
わかりやすく案内するサービスです。



EAST

このQRコードでの案内は、
大阪・梅田周辺地下街で
約200箇所確認できます。



●地上ではGPS機能付携帯電話で
位置を特定し検索できます。



ケータイ操作方法



コードを
読み取り



簡単
アクセス



**ご利用は無料です!
会員登録も必要ナシ**



【お問い合わせ】

財団法人 大阪市都市工学情報センター
E-mail: umechika@osakacity.or.jp

■このサービスの構築には総務省の交付金を利用しています。■【事業主体】大阪地下街(株)【運営】(財)大阪市都市工学情報センター
【アドバイザー】地下街マップ検討協議会(大阪地下街(株)、大阪市交通局、西日本旅客鉄道(株)、阪急電鉄(株)、阪神電気鉄道(株)、
大阪市街地開発(株)、大阪市計画調整局、(財)大阪市都市工学情報センター)
■本サービスをご利用の際は、パケット通信料がかかります。■QRコード®は株式会社デンソーウェーブの登録商標です。

駅構内及び車内の『携帯電話のご利用マナー』にご協力ください。

障害者の労働とは？

岸田 美

智子

前回までの内容では日頃私が感じていることや、私を支えてきてくれたものはなんだったのかと言うことを書いてきました。今回は、3回目で最後になると思うので、今一番私が感じていることを書いてみたいと思います。それは、私のような重度障害者がはたらくということです。過去に重度障害者のグループだった「青い芝」のメンバーの主張で「重度障害者は、食べること、トイレに行くことなど、生きていることが重度障害者の労働だ」という労働観がありました。これは、身体の緊張のきつい重度障害者にとって日常生活がとても体力がいることだし、その動作などを健常者が見ることによって価値観が変わったり、健常者が汗水たらして労働することと同じ価値があることだということを主張されていたのだと思います。つまり、この頃の重度障害者の生きる権利を認めてこなかった健常者社会への対抗意識として、このような主張が出てきたのだと思います。前回に私の書いた、黙っていると殺されていく危機感があったからこそ、このような主張があったのだと思います。が、しかし今の私は、正直に言うと、生きていることが労働だという考え方は重度障害者にとってもしんどい主張ではないかと思ってしまうのです。食べることや、トイレに行くことや行動することがいちいち労働だと考えて、日々生活しているわけではないと思うし、そこまでしんどい生き方を背負わなくてもよいのでは、と思ってしまいます。もっと、食べる事や、トイレに行くことなんて気楽に、無意識にできてこそ当たり前前の地域での自立生活が取り返せるのではないかと考えています。

これを読まれている皆さんはどうおもわれますか？

労働という枠で、障害者と健常者の問題を考えてしまうのではなく、働けない人間も同じように生きていく社会があるべきだし、命はどんな条件であろうと平等だと思います。ということは、難しい言葉で言うと人間の価値を優と劣に分けてしまう優性思想に繋がっていきそうな気がします。

そして最近、私は「はながゆく」というDVDを見ました。このDVDは、赤坂はなさんという重度心身障害者の方の就職活動を追いかけた記録です。この、はなさんは、私もときどきお会いするのですが、車椅子で、コミュニケーションもとても難しく、顔や表情や仕草

などで、周りにいる人が読み取っていきます。食事は、口から食べる事は難しいので、いつも、鼻から管を入れての気管栄養です。

今22歳で、ヘルパーと一緒に、24時間介護で一人暮らしを始めています。彼女の周りにはいつも、何故か、仲間や友人が集まって、出会いが絶え間なく続いていく楽しい生活をされているようです。そんな車椅子の彼女が今、ヘルパーさんと一緒に、就職活動に忙しい日々を送っています。ある大学の異文化コミュニケーションの授業では、先生のアシスタントとして授業を手伝っています。学生達が、自分達と違うコミュニケーション方法を持った、はなさんと、どうやってコミュニケーションを取っていくかを実体験していきます。最初は、どうしたら良いのか分からない学生達も、どんどん関わろうという態度に、何故か、自然と変わっていきます。中には、いつまでたっても関わろうとしない（関わり方が分からないので諦めているのかも知れません。）学生や無視している学生もいるそうですが、そんな自分に、学生自身が、気が付く事が出来る場を、この授業では、はなさんから学んだ事になるのです。このDVDの中では、学生達一人一人が、はなさんから聞き出した情報を基に、はなさんの事を紹介する場面が映っていました。このように、はなさんがいる事によって、この授業は成り立っています。そして、このような学生達の実体験は、今後の学生達の人生に、少なからず影響を与えていける授業だと私も思います。この大学では、はなさんへの授業料として、一回3000円支払われています。まだまだ、アルバイト的ですが、はなさんの仕事が、この社会で、仕事として評価されていく可能性が出てきています。このように、重度障害者の労働の形もいろいろな可能性が生まれてきています。

また私は、重度障害者の方々の地域での自立生活を支援してきましたが、ほとんどの方が日中は生活介護事業所に通い、自宅やグループホームでそれなりに生活していくパターンになってきています。買い物などで地域の人たちとの触れ合いも少しは出来ていると思いますし、皆さん生活保護や、年金を受給され生活しています。そんな方達はこのはなさんのような就職活動なんて思いもつかない方も多くいます。なので、労働というイメージが作りにくいと思います。そんな方たちへの支援の中に労働に対するイメージ作りや、情報が今後必要になってくると思います。労働というものにどのような考えをもち、どのようにチャレンジしていってもらうのか日々悩んでいる今日この頃です。

そして今、各C I Lの考え方としてどのような労働観を仲間や、この社会に伝えていくのが、とても問われているような気がします。

皆さんはどうおもわれますか？

便利福祉機器紹介

『車いす用レインコート』と聞くと、あんまりオシャレなイメージはないですね。もっとオシャレなものがあればと思っている方は多いのではないのでしょうか？今回ご紹介するのは、ツーピースタイプでフードと足カバーに分かれているちょっとオシャレなレインコートです。



青おに作業所の辻井さんに協力してもらいました



車椅子レインコート。介護用車椅子向き。耐久性、撥水性、透湿性のある生地が使用されています



ツーピースタイプでフード・足カバーに分かれているので、別々に使うこともできます



足カバーは、腰の部分のマジックテープで止められます



フードは取り外し可能です



ハンドグリップ部分に手を入れることができ、介助者の手が濡れません

商品名：株式会社サンプラス ナイスサポートコンポ 車椅子レインコート(大人用)

カラー：ホワイトベース(ホワイト×ブルー×レッド)

サイズ：フリー

備考： 夜間に安全な反射テープ・収納袋付き

インクルーシブ教育セミナーに行ってきました！

平沼 遊

9月11日に行われたインクルーシブ教育推進ネットワーク大阪会議主催のセミナー「特別支援教育からインクルーシブ教育へ」に参加してきました。今回のセミナーは2部構成。1部がイタリア、ボローニア大学で障害児教育について研究されているアリーチェ・イモラさんの講演。2部はアリーチェさんも含む多彩なシンポジストを招いてのシンポジウムが行われました。

イタリアでは1970年代に障害児と健常児が共に学ぶ統合教育が法律で定められました。それまでは、障害児は特別な学校に通う分離教育が当たり前でした。どうしてイタリアでは急に方向転換ができたのか。これには当時のイタリアの社会的背景があったようです。当時、世界的な盛り上がりを見せていた大学紛争、学生運動。そしてイタリアでも現在の日本と同じく政権交代が起こりました。その流れからまず障害者の就労の権利を保障する法律ができ、学校教育では貧困家庭の子どもは教育を受けられなかったのですが、全ての子どもに教育を保障する法律ができました。そして、障害児も同じように教育を保障する法律が定められたのです。セミナーで司会をされていた堀智晴さんの言葉を借りれば、分離教育から統合教育に「スイッチをひねった」のです。その法律では通学の保障、学校内でのアシスタントの保障、20人以下のクラス編成、時間割を柔軟にできることなどが盛り込まれ、当初は教師たちも戸惑いながらも障害児と共に学ぶ教育方法を編み出し、現在では統合教育が当たり前になっているとの事でした。アリーチェさんは29歳、つまりイタリアで統合教育を受けながら育ってきているのです。イタリアにはもう公立の障害児専門の学校はないそうです。アリーチェさんは、統合教育は障害児本人にとってももちろん、他の健常児にとっても非常にいい影響があり、共に学ぶことでお互いに学び合うことができるのだと、強調されていました。

シンポジウムでは、大阪で行われてきた共に学ぶ教育を受けて育ってきた当事者のお話、障害児の親御さんからのお話がありました。イタリアでの実践を聞き、勇気付けられたシンポジストもこれからの活動がますます精力的になっていくように感じられました。

日本では現在、「障がい者制度改革推進会議」のもとで、国連の「障害者権利条約」への批准に向けてあらゆる方面から議論がなされています。教育に関しても、「あらゆる教育段階において障害者にとってインクルーシブな教育制度を確保すること」が必要とされており、これに向けての議論が推進会議でも行われています。また、文部科学省でも「特別支援教育のあり方に関する特別委員会」が行われており、特別支援教育がインクルーシブ教育だとする方向の議論がなされています。今後、日本では教育の制度がどんな風が変わっていくか、ますます目が離せなくなりそうです！

※インクルーシブ教育・・・障害があろうと合理的な配慮と支援によって普通学級で共に学ぶ教育

編集後記

今年の夏は観測史上最も暑い夏だったようで、熱中症によって各地で多くの方が亡くなったようですが、私にとってもこの夏はかなり厳しいものでした。頸髄損傷という障害の特性ゆえに体温調整がうまく行えず、熱中症の一步手前といたしますか、何度もしんどい状態に見舞われました。夜になっても、クーラーを止めると30℃を下回らないという異常な暑さに、今までになく体調を整えるのに苦労しました。夏が暑い年は冬も寒いらしく、今から冬が心配です…。

(ま
つぎ)

1人暮らしを始めて半年以上経ち、毎日料理して掃除もして…最初のイメージではもっとちゃんとしているはずだったのに。こんなはずじゃあない！と思いながらも、自分のやりたいように時間を割り振れる生活は予想以上に楽しくもあります。

最近、1つ歳をとりました。周りからは「おっさんになったね（褒め言葉）」と言われるようになりました。しっかりしている印象があったんですが、なってみるとそんなことはまったくなく…予想と現実は違うものです（笑

(あだち)

▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽

自立生活センターナビとは…

☆ 私たちの考える「自立」は…

働いてお金を稼ぐ事や身の回りのことを全部自分で出来るようになる事、それだけが「自立」でしょうか？もちろんそれも大切なことですが、できない事は人の手を借りたり、気持ちを上手く伝えられないときには仲間にサポートしてもらったりしながら、一人一人の生活を創っていくことも「自立」に色々な方法でお手伝いしていきたいと考えています。

☆ 地域で障害者の自立を実現していくための「道案内（ナビゲーター）」として例えば「介護してくれる人を探しているんだけど？」「家の中をもっと使いやすくしたいけどどうすればいいの？」そして「自立したいけど自分には無理かな？」
自立生活センター・ナビでは、こうした障害者や家族の悩みや相談について、障害を持つピアカウンセラーが同じ障害者の立場でお話を伺い、制度の説明や申請のお手伝い、住宅改造などのアドバイスをさせていただきます。その他、電動車いすで街へ出かけたり仲間と一緒に料理を造ったり地域で生活していく上で必要なことを、楽しみながら経験できる「自立生活プログラム」や、自立生活に関わる各分野の方々をお招きしてお話を伺う「自立生活セミナー」の開催、情報誌「ナビゲーション」の発行も行っています。

はつこ

発行

じりつせいかつ

自立生活センター・ナビ

でんわ 06 (6760)2671

じゅうしょ

住所

〒546-0042 大阪市東住吉区西今川2-3-8

ファックス 06 (6760)2672